

Q & A

長州の幕末

維新回天をなぜ牽引したのか

Yanaguchi Masayuki

山内昌之

●歴史学者●

PROFILE 昭和二十二年（一九四七）、札幌市生まれ。
カイロ大学客員助教授、ハーバード大学客員研究員、
東京大学大学院教授などを経て、現在、明治大学特任教授、
東京大学名誉教授。平成十八年、紫綬褒章を受章。
『幕末維新に学ぶ現在』シリーズシブ 胆力と大局観
『中東国際関係史研究』歴史とは何か など著書多数。

幕末動乱の時代、維新への流れを

常にリードし続けたのは長州藩だった。

村田清風による天保の藩政改革の成功後、

一つの転機をもたらしたのは、

列強への危機感から変革を呼びかける

吉田松陰の登場であつたろう。

そして松陰が幕府の手で処刑されると、

松下村塾で薫陶を受けた若者たちや、

彼らに共鳴する者たちが

次々と起ち上がる。

高杉晋作、久坂玄瑞、吉田稔麿、

入江九一、伊藤俊輔（博文）、

山県狂介（有朋）、さらに桂小五郎（木戸孝允）、

周布政之助、小田村伊之助…

彼らはたびたび逆境に陥りながらも、

何を目指して奔走し、

維新を導いたのだろうか。

幕末の長州を知る上で欠かせないポイントを、

Q & A形式でわかりやすく紹介しよう。

吉田松陰 萩市松陰神社蔵、
久坂玄瑞（山口県立山口博物館蔵）、
高杉晋作（岡山県立岡山博物館蔵）、
小田村伊之助（萩市蔵）、提供：群馬県立歴史博物館
背景：田床山より萩城下を望む写真提供：アマネイメーجز



第一部 立志篇

長州と他藩の違いは？ 松陰は何を教えていた？

嘉永六年（一八五三）の黒船来航を機に訪れた幕末動乱の世。長州藩は後に「雄藩」と語られる存在でありながらも、幕政の「蚊帳の外」に置かれていた。そんな中、叔父・玉木文之進の後を受けて松下村塾で塾生に教えたのが、吉田松陰であった。長州藩はなぜ反幕へと舵を切り、やがて維新を目指したのか。

Q1 幕末の始まりは黒船来航がきっかけといわれます。どんな変化が起きたのですか？

嘉永六年（一八五三）、アメリカ合衆国のペリー率いる東インド艦隊が、浦賀に来航しました。この事件が「黒船来航」と呼ばれ、「幕末」と呼ばれる時代の始まりとして語られます。

日本近海に異国の船が現われたのは、この時が初めてではありません。徳川幕府は十九世紀初頭より、しばしば姿を見せるロシア船への対応に苦慮していました。また、文化五年（一八〇八）にはイギリス船が長崎港に侵入する事件も起きています（フェートン号事件）。武士階級のエリートたちは、日本に異国の脅威が迫っていることを明確に認識していました。

それでも黒船来航がクロースア

ップされるのは、庶民の意識に極めて大きな変化をもたらしたからです。突如として出現した黒船を、武士たちに追い払う術はありませんでした。それまで、武士階級が自ら勤勞せずに両刀を差して暮らせたのは、有事の際に庶民を守るという「ノブレス・オブリージュ」が根底にあったからです。しかし、二百数十年の泰平の世を経て、武士たちにそうした自覚と自信は薄れ、危機に対処する力も失われていま

した。結果、アメリカの求めるままに和親条約が締結され、日本が置かれている危機的状況と武士の無力さが白日のもとに晒されたのです。これを受けて、幕府では川路聖謨や勝安房（海舟）といった下級旗本御家人出身の有能な実務官

僚、地方では下級藩士が新たなエリートとして台頭します。黒船来航

を機に、いわば「静かなる下克上」が始まるのです。

Q2 日本は黒船来航時、世界的観点では、どんな状況に置かれていましたか？

「黒船来航」は日本史では突然の出来事ですが、世界的に見ればひとつの大きな流れの中で捉えられます。一八四〇年（天保十一年）同十三年にアヘン戦争、一八五三年（嘉永六年）安政三年にクリミア戦争が起こりました。この二つの戦争を契機に、アジアの老大国であった中華帝国（清朝）と、中東を支配していたオスマン帝国の分解が始まり、国の

土台が脆くも崩れます。一方、世界市場を押さえるとするイギリスやフランス、プロイセンなどのヨーロッパ諸国が、新たな利権獲得を目指して世界を席捲しました。折しも、アメリカでは開拓民が西海岸まで到達し、フロンティアが消滅しつつあった時期です。欧米列強にとって最後に残された巨大な魅力あるマーケットこそ、国を閉ざしていた日本だったのです。

Q3 長州藩は、黒船来航の約二十年前の天保の藩政改革で海防を強化しています。他藩と比べて国防意識が高かったのですか？

幕末の長州藩を考える際に、地政学的観点は非常に重要です。地図を見れば分かる通り、長州藩は朝鮮半島を介して最も大陸に近い藩のひとつであり、自ずと海防への意識は高くなります。その先駆

者が、天保の藩政改革を行なった村田清風でした。村田は天保十一年（一八四〇）に神器陣用掛に任ぜられると、藩主・毛利敬親に「いつ外国船が攻めてきてもおかしくないので、軍事技術の習得を第一に



「ペリー提督・横浜上陸の図」（横浜開港資料館蔵）。ペリーの2度目の来航時の様子を描いている



右：「新製輿地全図」（萩博物館蔵）。地理学者箕作省吾が出版した世界地図で、松陰が下田で海外渡航を企てた時、荷物の中にあった



「駕輿巡幸図」(萩博物館蔵)。安政5年(1858)以前の萩城下町の賑わいの様子が描かれている

る砂糖生産、燭燭の製造など、長州藩は特産物の流通・販売で成功を

収め、実質百万石の収入となるのです。

**5 長州藩は、後世に「雄藩」と呼ばれる存在に
なりますが、薩摩藩や越前藩のように
幕府政治に影響力を持ちましたか？**

長州藩と薩摩藩や越前藩との間には、決定的な違いがあります。それは、徳川家と親族関係を結んでいるか否かです。越前藩松平家は徳川家康の次男・結城秀康を藩祖とする、御三家に次ぐ名門の親藩であり、しかも幕末の十六代藩主・松平慶永(春嶽)はもと御三家のひとつ・田安家の出身でした。一方の薩摩藩島津家は、毛利家と同じく関ヶ原の戦いで西軍についた外様大名です。しかし八代藩主・重豪の娘・茂姫、十一代藩主・斉彬の養女・篤姫が將軍家に輿入れしました(それぞれ十一代將軍・家斉、十三代將軍・家定の御台所です)。すなわち、大奥への勢力の扶植に成功したことで、幕府政治にも影響力を及ぼすことができたのです。片や、毛利家にはこうした幕府

どのパイプは皆無であり、幕政の「蚊帳の外」におかれまして。しかし長州藩には生産力、流通力、そして情報力についての強い自負と、藩校・明倫館から多くの人材を輩出している自信があります。さらに、関ヶ原の戦いで島津家は極高を削られなかったのに対し、毛利家は八カ国百二十万石から僅か防長二州に押し込められた。そうした因縁も相まって、長州藩は他



村田清風(村田清風記念館蔵)。要職を歴任し、藩政、特に財政に手腕を発揮した

藩のように幕政改革に関心を示さず、最初から急進的なスタンスを

**6 松下村塾を立ち上げたのは、
吉田松陰ではなく叔父の玉木文之進です。
玉木はどんな人物ですか？**

玉木文之進は、非常に面白い人物です。もともと吉田松陰の実家である杉家の出身で、松陰にとって血のつながった叔父にあたります。長州藩は歴代家老を出す家格を「寄組」、その下を「大組」と呼びますが、「無給通」という家格の低い杉家から文之進が養子に入った玉木家も大組でした。文之進は江戸に詰めて当役家老まで務めていますので、大組の中でも相当に

**4 毛利家は関ヶ原で敗れ、百二十万石から
三十七万石へ減封されましたが、天保の改革後には
実質百万石の収入があったといえます。
当時の長州藩の内情を教えてください。**

政治革命は、いつの時代、どの地域でもイデオロギーだけでなく財政的基盤も伴わなければ成功しません。その点、長州藩はまさしく磐石でした。

「防長三白」という言葉があります。長門と周防の名産三点である米・紙・塩を指しており、いずれも白く輝くことからそう表現されました。長州藩は十八世紀中期の七代藩主に就いた毛利重就の時代に「撫育方」という開発局を設け、三白の生産力向上に努めました。撫育方の収入は一般会計ではなく特

海防の志は受け継がれました。その代表的人物が、吉田松陰です。松陰についての詳細は後述しますが、彼は早くから、日本海に浮かぶ竹島(現在の鬱陵島)の開発に強い関心を向けています。安全保障への意識の表われに他なりません。

別会計であり、藩の手元金として蓄積されたといえます。これによって、藩の財政は次第に余裕を持ち始めました。重就は散財することなく、有事に備えたのです。

また、日本の流通の心臓部である瀬戸内海と、外洋を結ぶ位置に藩が所在していた点も見逃せません。商品流通の面で他藩よりも極めて有利であり、ヒトとモノ、そして情報も自然と長州に集まりました。こうした物品や貨幣の流通を担当するのが「越前方」です。他にも石炭の産出やサトウキビによ

とり、いち早く「反幕」へと舵を切ることとなるのです。

優秀だったはずですが、しかし、天保十一年(一八四〇)に部下の不始末で免職になり、二年後に萩の自宅で私塾・松下村塾を開きました。

松陰は幼少時に兵学者・吉田大助の養子となりましたが、大助が急逝してしまいます。そんな松陰に大助に代わって教育を施したのが、文之進でした。一時、明倫館で山鹿流兵学の代理教授を務めていた文之進は、厳格、品行方正を画に描いたような男であり、時には松陰に拳を振り上げることもあったといえます。しかし松陰は文之進の教育に喰らい付き、「師は誰か」と問われた際には「玉木文之進です」と答えました。

興味深いのは、文之進が親類の乃木希典の師でもあるという点でしょう。文之進は、やはり幼い乃



小田村伊之助(構取素彦、提供：群馬県立歴史博物館)

木も厳しく躰けました。松陰と乃木を育てたわけですから、相当高い教養と意志力を備えていたことが窺えます。

しかし、その最期は悲劇的で、明

Q7 玉本文之進の後、松陰は松下村塾で何を教え、何を目指しましたか？

山鹿流兵学者の松陰は、脱藩の罪を犯してまで全国各地を歩き、日本の海防の実情を見て回りました。

これは彼の学問のエスプリが、「知行合一」の陽明学(ようめいがく)に限りなく近いことと関係しています。知識を得たならば、直ちにそれを生かすべく行動を起こさなければならぬ——。松陰は、「死生は度外(どがい)に置き、倒れてもいいから進め」と弟子たちに手紙を送っています。このように思想家でありながら書齋にこもらないところが、松陰の偉さであり凄みでしょう。松下村塾の講義では、必ず世相(せそう)の諸問題に結びつけた具体的な議論が展開されたといえます。そして松陰は、学んだ知識を世のため、人のために

治九年(一八七六)に松下村塾生の前原一誠(まえばらいっせい)が萩の乱(りょう)を起すと、教え子や松下村塾生の多くが参加したことの責任をとって、自決しました。

生かすべきという「実践知(じっせんち)」を弟子たちに教えました。

では、松陰は具体的に日本をどんな方向に導こうとしたのでしょうか。彼が尊王攘夷論者(そんのうじやうい)であったことは間違いありませんが、「僕は毛利の家臣なり」と書簡に記しているように、毛利家や幕藩体制を頭(かぶ)なしに否定する意識はありません。松陰が真に目指したのは、開国して欧米の技術を早急に吸収し、日本を列強争覇(りやうきやうさう)の中で独立を堅持できる国につくりかえることだったでしょう。そして幕府政治がその障害になるのであれば、在野(ざい)の民が一齐(いっせい)に起ち上がって変革に突き進まなければならない……。これこそが松陰が唱えた「草莽(そうもう)崛起(きよく)し」でした。松陰は黒船に乗り込んで密航を図ったように、決して単純な排外論者ではありません。非常に柔軟な思考の持ち主である

と同時に、行動に矛盾(むじゆん)や過不足が一切ない、極めて純粋な思想家であり革命家であったことが分かります。

Q8 松下村塾の特色は何ですか？

前述したように、実践を重視したことが最大の特徴ですが、残された松陰の手紙などから推察するに、教育者としての松陰は個々の弟子をよく観察し、長所を伸ばす人物だったようです。また、松下村塾には厳しい塾則やテキスト、さらには時間割すら存在していま

せん。あくまで塾生個人の意欲に任せる指導方針でした。

藩校・明倫館との大きな違いでいえば、明倫館が武士しか入校できなかったのに対して、松下村塾は軽輩(けいはい)身分の足軽や中間、さらには農民や町人など、身分を問わず誰もが入塾できた点でしょう。中

間身分の山県有朋(やまがたありとも)や、農民出身の伊藤俊輔(いとうしゆんすけ)は、明倫館では学べなかったのです。また、緒方洪庵(おがたこうあん)の適塾(てきじく)や広瀬淡窓(ひろせたんそう)の咸宜園(かんぎんえん)と比べると、地元出身者の占める割合がずば抜けています。松下村塾では、松陰の評判を聞きつけた青年たちが自由に知識を吸収し、才能を伸ばしていたのでしょう。

なお、松陰が安政六年(一八五九)に安政の大獄(たいごく)で江戸の牢屋に送ら

Q9 松陰の松下村塾は、長州藩内の主流勢力だったのですか？

下級藩士やそれ以下の身分の人物が多かったこともあり、藩内では「一部の有志」に過ぎません。長州藩政の主流に座っていたのは、やはり寄組や大組ら上位の身分の面々でした。

ただし、幕末史の中で俯瞰(ふくかん)すれ

れると、松陰の妹文四女と結婚した久坂玄瑞(くさかげんずい)や、同じく妹の寿次女と結婚した小田村伊之助(後の群馬県令構取素彦)です。なお、構取は明治に未亡人となった文と再婚します。さらによって断続的に勉強会が開かれました。小田村は藩医の息子で、明倫館で教鞭(きょうべん)を執っていた俊才であり、松陰も信頼する人物でした。なお、明治に入ると、松陰の顕彰に尽力しています。

松下村塾。この地から、多くの俊英が輩出された
吉田松陰(萩市松陰神社蔵)



第二部 回天篇

なぜ攘夷実行なのか？ 幕末で果たした役割とは？

文久三年（一八六三）五月に攘夷を決定した長州藩は、その後、八月十八日の政変、禁門の変、そして四万国連合艦隊との馬関戦争で敗北を喫し、危機的状況に追い込まれる。しかし長州藩は、あくまで反幕と尊王攘夷を貫く。高杉晋作の活躍で反幕路線を確立すると、宿敵・薩摩藩と同盟を締結し、維新回天へと突き進んでゆく。長州藩こそ、変革の先駆者であり、原動力であった。

Q1 吉田松陰が処刑されると、長州藩内でどんな変化が起きましたか？

安政六年（一八五九）十月二十七日、松陰は三十歳の若さで、幕府により斬首に処されました。大老井伊直弼による「安政の大獄」の中で出来事です。

遺書『留魂録』の中で松陰は、同志たちが遺志を継いでくれるならば、私が撒いた種は尽きず、収穫のあつた年に恥じないだろうと記し、弟子たち一人ひとりに細かなアドバイスを与えています。その文章は高い精神性に溢れており、死の直前にこれだけのものを書ける人物は、世界史の中にもそうはいないでしょう。

とはいえ、松下村塾は藩の主流

ではなかったため、松陰の処刑が即座に藩論に影響を与えたわけはありません。むしろ松陰の死は弟子たちに不退転の覚悟を抱かせた点で、幕末史に甚大な影響を及ぼしました。

当時、病床にあつた前原一誠は「先師既に忠義に死す。余門生たり。遺志を奉じて忠義に死せざれば何の面目ありて地下に先師に見えん」と決意を表わしています。師の無念の死に接した弟子たちは、幕府に対して怒りと不信感を大いに募らせ、必ずや松陰の志を継ぎ、日本の変革を成し遂げようと心に誓ったのです。

Q2 長州藩はその後、京都で政局をリードします。彼らは何を目標としたのですか？

井伊直弼が桜田門外の変で討たれた後、文久年間に入ると、幕府は朝廷との融和を図る「公武合体」に方針を転換。それを背景に長州藩は京都に次々と藩士を送り込み、朝廷と関係を深めて政治の主導権

を握ろうと画策します。中心は、「航海遠略策」を唱えた長井雅楽でした。航海遠略策はいわゆる積極的開国策であり、外国との交易で国の富を増やす、という非常に合理的な論です。松陰の考えと通じる



長井雅楽(萩博物館蔵)

Q3 文久三年（一八六三）、長州藩は下関で攘夷を決定します。なぜ戦ったのですか？

文久三年三月、長州藩の朝廷への政治工作もあり、幕府は五月十日を期しての攘夷決行を孝明天皇

部分も多く、実際、後の明治政府はこの路線を採ります。

しかし文久二年（一八六二）、薩摩藩国父・島津久光が率兵上京し、朝廷の信任を得たことから長井の策や長州藩の影が薄くなりました。さらに攘夷を唱える松下村塾の塾生ら藩内勢力は、遠略策を幕府におもねる考え方と捉え、長井は失脚し、自決に追い込まれます。そして長州藩内では、諸外国と結んだ条約を破棄して攘夷決行を主張する「破約攘夷論」派がイニシアティブをとりました。

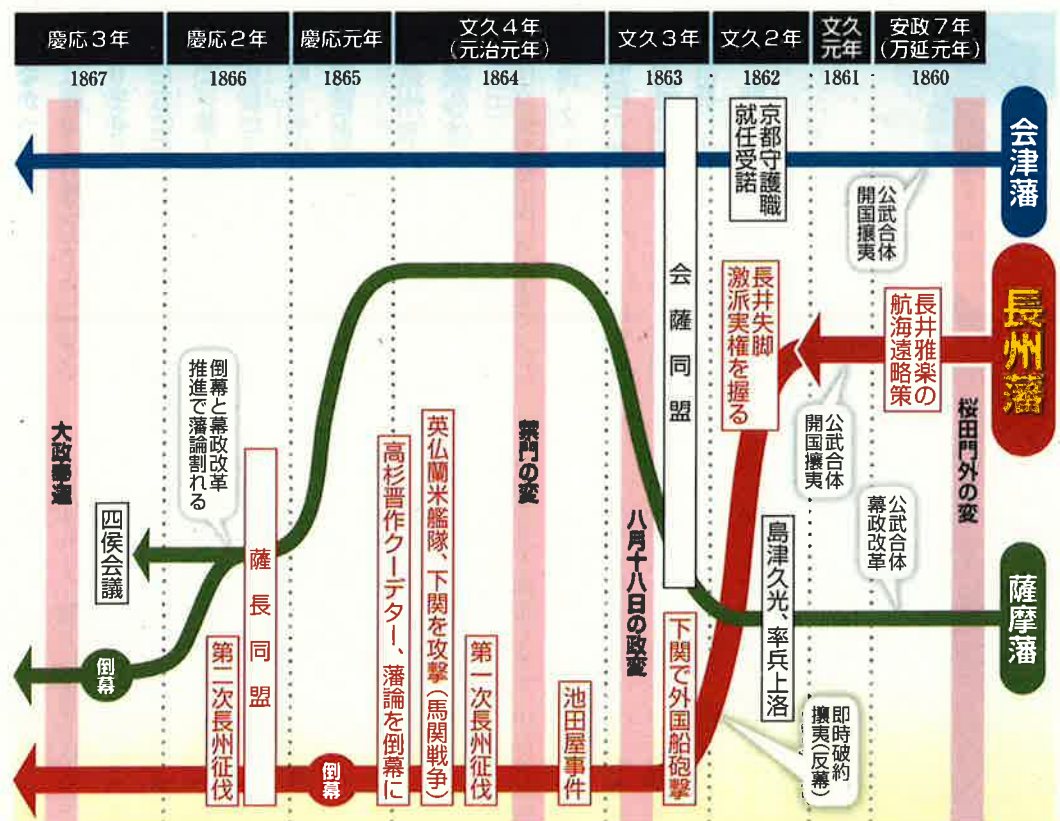
この強硬論は、朝廷の方針と一致します。長州藩は幕府でなく、朝廷を第一にすべきと藩論を転換したのです。ここから長州藩は朝廷の方針を盾に、幕府から政治のイニシアティブを奪う、すなわち「反幕」を明確に視野に入れ始めました。

傑物・長井が志半ばでこの世を去り、今なおステレオタイプの悪役として語られがちなのは遺憾ですが、京都では次第に長州派の志士が佐幕派の人物を暗殺し、力づくで政局をリードしました。



「馬関戦争図」(下関市立長府博物館蔵)。長州藩はあくまで攘夷を決定した

維新を目指して…長州藩の歩み



5 池田屋事件で命を落とした吉田稔麿はどんな人物と評価できますか？

山内容堂(土佐藩)、伊達宗城(宇和島藩)ら後の四侯会議の面々を加えた「参預会議」で国政を議論しています。なお、久光と意見を異にし、後に薩長同盟に踏み切るのが西郷隆盛や大久保利通らでした。ともあれ、薩摩藩は会津藩と同

元治元年(一八六四)六月、京都三条小橋の旅籠池田屋で、反幕派の志士と新選組が斬り合いました。この池田屋事件で、肥後藩士・宮部鼎蔵をはじめ何人もの俊英が命を落としたが、その中に松下村塾出身の吉田稔麿もいました。そもそも稔麿は、強硬な反幕思想の持ち主ではありません。むしろ長州藩内では「幕府通」として知られました。稔麿は松陰死後の万延元年(一八六〇)、脱藩して江戸に向かい、旗本の妻木家に仕えて、その能力から重用されたといわれます。幕臣の人脈を持ったのは、この時です。池田屋で凶刃に斃れ

スの通報艦、オランダの軍艦に砲撃を仕掛けたのです。翌月にフランス軍艦に襲撃されて下関の前田砲台を占領されますが、藩論で掲げた「攘夷」を実行したことこそ、長州藩の他藩との違いです。例えば、桜田門外の変などから「過激」な印象のある水戸藩は、攘夷を唱えながらも具体的な行動は起こしていません。しかし長州藩は、攘夷を唱えた以上は実行する、知識と行動は一体化しなくてはならない、とロシア十月革命

直接の原因は、薩摩藩が会津藩と手を組んで長州藩を朝廷から掃した、文久三年の八月十八日の政変です。まずは、薩摩藩の政治スタンスを見ていきましょう。薩摩藩は長州藩と同じく「攘夷」を掲げていたとされます。それ自体は間違いないではありません。しかし一方で、薩摩藩は藩主の息女や養女を将軍家に興入れさせ、幕府

命を主導したボリスエヴィキのように一切の妥協を許しませんでした。一方、その陰で長井雅楽や周布政之助が自決に追い込まれたように、凄惨な藩内政争が行なわれました。この点が、現実感覚とリアリズムで妥協を厭わない薩摩藩との差異です。そんな長州藩にリアリズムを持ち込み、藩論をまとめるキーパーソンとなったのが、海外渡航経験のある高杉晋作や伊藤俊輔、井上聞多(馨)ら松陰の衣鉢を継ぐ者たちでした。

6 禁門の変で長州藩は敗れました。なぜ戦ったのですか？

元治元年七月、長州藩は福原越後、国司信濃、益田右衛門介の三家老が兵を率いて上京、禁門の変こと蛤御門の変が起きます。福原などのエリート上層部から久坂玄瑞ら下級武士までもが反幕、さらには「薩賊会奸」でコンセンサスを取って(久坂は、実は当初は威力上訴に反対しています。これに関しては次の問いで言及します)、京都御所へと押し寄せました。藩主の冤罪を帝に訴えるという名目で、八月十八日の政変以来の、京都での失地回復を図るためです。

盟を結び、八月十八日の政変でクーデターを執行。朝廷から長州最肩の公卿がことごとく追放され、長州藩は御所の守衛を解かれて、京都を追われました。長州藩にとって、幕府以上に憎むべきが薩摩・会津の同盟となった瞬間でした。

たのも、江戸と長州を行き来する最中のことでした。稔麿は高杉晋作、久坂玄瑞、入江九一とともに「松門四天王」に名を連ねます。松陰はその才能を深く愛し、高杉の「陽頑」に対して稔麿を「陰頑」と評しました。勤勉実直で他人の言葉に左右されない芯の強さを持つている、というのです。逸話を一つ紹介しましょう。稔麿はある日、一枚の紙に放牛、烏帽子(袴を着た坊主とも)、木刀、そして片隅に棒を描きました。山県狂介が意味を問うと、高杉は溢れる才を御しきれない「放牛」であり、久坂は気位が高くて人を率



下関の前田砲台跡。文久3年(1863)、攘夷決行に用いられた(写真:近戸秀夫)

震災の 教訓をいかす基金を。



東日本大震災の最大の教訓。
それは、災害対策は
起きてからでは遅いということ。
大災害が起きたとき、
まっ先に動くための支援金を
蓄える仕組みが必要です。
あの震災で学んだことを、
未来のために。

お金の使いみち
ボランティア・NPOの緊急活動支援 など

支援金の寄付を募っています。

<災害復興支援特別基金>

銀行名：三菱東京UFJ銀行
支店名：本店
預金種別：普通
口座番号：1660782
口座名(漢字)：公益財団法人日本財団
口座名(カナ)：ザイニッポンザイダン

お問い合わせ先：03-6229-5111

日本財団
THE NIPPON
FOUNDATION



久坂玄瑞(上、山口県立山口博物館蔵)と高杉晋作(国立国会図書館蔵)は松下村塾の両雄としてその名を轟かせた

久坂と並び称された高杉は、
どんな人物と評価できますか？

「才の久坂」に対して「識の高杉」

と謳われたのが、幕末、八面六臂

の活躍を見せた高杉晋作です。高杉は、往々にして革命家としての資質のみが語られがちです。しかし、彼が毛利家代々恩顧の臣で、二百石取りの大組に属する名家に生まれたことも見逃せません。高杉は世子・定広の小姓からキャリアをスタートさせますが、藩上層部には多くの親戚がいました。周布

戦争の大敗で、長州藩が「攘夷を放棄」したかといえ、そうではありませんか。確かに一時的に、幕府との融和を目指す上士中心の「俗論党」の棟梁藤太らが政権を握りま

きず戦端は開かれ、長州は惨敗。改めて列強の脅威を肌で知ることとなります。

なお、この時に「宍戸刑馬」の名で休戦交渉に当たったのが高杉晋作でした。高杉は「長州藩が領土を割譲する条約を結ぶならば、貴国は長州を一つの国と認めたこととなる。三百諸侯といちいち個別に条約を結ぶつもりか」と啖呵を切り、領土を守りました。凄まじい開き直りですが、国際法に照らし合わせると、あなたが間違っているではありません。もっとも、高杉に正確な国際法の知識があったかどうかは疑問です。

ところで、禁門の変に続く馬関

7 禁門の変で討死した久坂玄瑞は、 どんな人物と評価できますか？

久坂は、しばしばラディカルな反幕主義者と捉えられがちです。しかし、実際には京都で長州藩の有免を幕府に請い続けるべきと主張しており、禁門の変では決して即時進撃の主張者ではありませんでした。さらに言えば、彼は医者出身であり、極めて緻密な男です。むしろ、米島又兵衛や真木和泉のような久坂よりも遥かに年かしのリーダーのほうに過激でした。来島は久坂に、「お前のような意気地無しは、東寺の塔か天王山にでも

上つて見物しておれ」と罵ったといえます。当時、二十五歳の久坂が、四十八歳の来島にこうまで面罵されては、久坂が武士として進撃に踏み切るのには当然だったでしょう。軍議の後、久坂は入江九一と永別を覚悟し、二人は路傍の木材に腰かけて、川の水で別杯を無言で交わしあいます。勝算のない戦いに挑む久坂の決死の覚悟が感じられる大変感動的なシーンであるとともに、誠に痛ましい犠牲であったと感じずにはられません。

8 禁門の変の直後、長州藩は英仏蘭米の 連合艦隊の襲撃を受けて敗れました。 この戦争は長州藩にどんな影響を与えましたか？

いわゆる馬関戦争です。前述したように、前年五月に長州藩は攘夷を決行しました。その本格的な報復として、四カ国連合艦隊が来

襲したわけですね。イギリス留学から急ぎ帰国した伊藤俊輔や井上聞多は、連合艦隊との戦いを止めようとしたが、藩内を説得で



「毛理嶋山官軍大勝利之図」(萩博物館蔵)。戊辰戦争を描いたもので、官軍の中心を担った長州軍の旗が見える

や棕梨もその交友範囲の中に入っていたのです。また松下村塾では、下級武士出身の尊王攘夷派と通じており、実に幅広い政治基盤の持ち主だったのです。そもそも、単なる松下村塾生であれば、藩から馬関戦争の和平交渉を任せられるはずがありません。

高杉の数ある活躍の中でも、元治元年十二月の「功山寺決起」は特

「薩長同盟」が幕末史にもたらしたものは、何ですか？

慶応二年（一八六六）一月、長州藩は土佐の坂本龍馬を立会人に、薩摩藩と同盟を結びました。八月十八日の政変以来、犬猿の仲の二つの雄藩が手を結んだことは、幕末史の流れを大きく変えます。長州のみでは幕府と渡り合えないのは石高や軍事力を見れば明らかであり、他藩とのコアリション（提携）は必要不可欠でした。そこで過去の恨み辛みをひたすら脇に置いて、同盟が結ばれます。実際、同年六月の第二次長州征伐で薩摩藩が幕

府軍に参加していれば、長州藩の運命は大きく変わっていたでしょう。

薩長同盟締結の背景の一つは、第一次長州征伐頃から、西郷隆盛が長州藩に同情的になった点が挙げられます。西郷は薩長同盟後、イギリス外交官・アーネスト・サトウに、長州問題を解決できないほど弱体化した幕府に外交を委ねるのは弊害が多いと語っており、この頃から倒幕の構想を描き始めたのでしょう。

薩長同盟締結の背景の一つは、第一次長州征伐頃から、西郷隆盛が長州藩に同情的になった点が挙げられます。西郷は薩長同盟後、イギリス外交官・アーネスト・サトウに、長州問題を解決できないほど弱体化した幕府に外交を委ねるのは弊害が多いと語っており、この頃から倒幕の構想を描き始めたのでしょう。

維新への流れの中で、長州藩が果たした役割は何だったのですか？

慶応三年（一八六七）の大政奉還と王政復古による新政権樹立、そして翌年の戊辰戦争を経て、我が国は明治維新を迎えることとなります。この辺りの流れは、歴史の教科書でも言及されており、運動の中心に長州藩がいたこともご承知の通りです。では、長州藩が幕末の日本で果たした役割は何であったかを考察して、本特集の締めくくりとしたいと思います。

長州藩は薩摩藩のように、外交や権謀術数の限りを尽くして回天の事業に関与したわけではありませんが、最後の最後で徳川を見捨て、鳥羽・伏見の戦いで不承不承倒幕軍に与した土佐藩や、その他の勝ち馬に乗った佐賀藩などの諸藩とも全く異なります。長州藩は紆余曲折はありながら、一貫して尊王攘夷と反幕を「狂信的」ともいべき純粋さで行動原理の中軸に据え続け、政治の局面を動

かしました。世界史を見ても、国や社会の体制を大きく変える時には、牽引力としてのラディカリズムが不可欠です。幕末の日本においては、長州藩こそがその先駆者であり原動力となったのです。

その一方で長州藩は、多くの犠牲を払いました。幕府と戦い、列強とも戦い、また内戦も絶えなかった稀有な藩でもあったのです。多くの同志を失いながらも、彼らは尊王攘夷、そして反幕を貫き、最終的には倒幕を成し遂げるリゴリズム（厳しさ）を有していました。むしろ吉田松陰らの死が、リゴリズムをもたらしたとと言えるかもしれません。そうした点を鑑みれば、長州藩は維新結実の中で「革命の先兵」ともいべき存在でした。しかも急進的な政治革命に成功したという点でも、世界史でも特筆すべき役割を果たしたというべきではないのでしょうか。

ミネルヴァ日本評伝選

*四六判上製カバー／毎月10日刊

毛利元就

武威天下無双、
下民憐愍の文徳は未だ

岸田裕之著

472頁 3800円

安芸の国衆から一代にして中国地方を一手におさめる大名へと毛利家を導いた毛利元就。激動の時代にあつて元就はどのように領域を拡大し、広大な領国を掌握するに至ったのか。「法制」、「経済」、「意識」の側面から毛利元就勇躍の秘密に迫る。

はじめに
序 境目地域の領主連合

- I 家中支配から領国統治へ
1 高橋氏の討滅と大宰府下向／2 郡山合戦と隆元への家督譲与／3 井上元兼の誅罰と領国「国家」の成立／4 陶隆房の挙兵と元就直轄領佐東／5 家中法と領国法／6 三子教訓状と張良兵書／7 領国統治と法制度
- II 商人的領主と領国経済
1 安芸国佐東の堀立直正／2 赤間関問丸役の佐甲氏／3 雲州商人司石橋氏と杵築相物親方職の坪内氏／4 出雲国由來村の森氏／5 硝石の輸入外交と西国大名の自立性／6 能島村上氏の海上支配権の構造と秀吉政権
- III 元就の意識と統治秩序
1 「書達」のことばとその変化／2 屋形様の「国家」から「天下」のもの／「国家」へ／3 毛利氏が用いた文書様式と主従関係／4 元就と隆元／5 元就と輝元

終 元就が遺したもの
おわりに／毛利元就年譜／人名索引



☆好評既刊☆

真田氏三代	真田は日本一の兵	笹本正治著	3000円
宇喜多直家・秀家	西国進発の魁とならん	渡邊大門著	3000円
淀 殿	われ太閤の妻となりて	福田千鶴著	2500円
細川ガラシャ	散りぬべき時知りてこそ	田端泰子著	2600円
黒田如水	臣下百姓の罰恐るべし	小和田哲男著	3000円

ミネルヴァ書房 〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1 ☎075-581-0296 宅配可/価格税別
E-mail eigyo@minervashobo.co.jp URL http://www.minervashobo.co.jp/

時代を見抜く座標軸

敵輸送船団か、敵主力機動部隊か…栗田艦隊が迫らせた決断とは

歴史街道

平成26年12月6日発行
[毎月1回6日発行] 通巻第321号
昭和63年6月14日第三種郵便物認可

1

January 2015

PHP 定価648円

総力特集 レイテ沖海戦から70年

戦艦大和反転の謎 その時、何が起きていたのか

特集 Q&A
長州の幕末

